

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷八十第

號念記年百二誕生スミス・ムダア

口繪 スミスの肖像・筆蹟・國富論初版扉・記念會寫眞

スミスの生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・経済學博士 本庄榮治郎

道徳的價値判斷に關するスミスの思想・・・・・・・・法學士 恒藤 恭

富國論の研究方法に就きて・・・・・・・・法學博士 財部 静治

スミスとコンデアックとの價値論・・・・・・・・法學博士 田島 錦治

スミスの所謂「眞實の價格」について・・・・・・・・法學博士 河上 肇

スミスの價格論と分配論・・・・・・・・経済學士 谷口 吉彦

スミスの自然主義觀と自由政策の見地・・・・・・・・法學博士 河田 嗣郎

スミスの自由放任論の特徴・・・・・・・・经济學士 堀 經夫

スミスの自由貿易觀・・・・・・・・法學士 作田 莊一

スミスの對植民地策・・・・・・・・法學博士 山本美越乃

スミスの租稅原則・・・・・・・・法學博士 神戸 正雄

スミスの公債論・・・・・・・・法學博士 小川郷太郎

スミスと浪漫派經濟學・・・・・・・・法學士 山口正太郎

スミスの名其生涯及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書・・・・・・・・商學士 武藤 長藏

書目 スミス關係書目(細目裏面を見よ)

記事 スミス記念會記事・・・・・・・・经济學博士 本庄榮治郎

スミスの謂ゆる『眞實の價格』について

河 上 肇

アダム・スミスが價值を分つて使用價值および交換價值の二種としてゐることは、誰でもが知つてゐるところである。例へば、彼は價值なる言葉には二の異つた意味があるとして、次の如く述べて居る。

『考へて見ると、價值なる言葉は二つの異つた意味を有つてゐて、或る場合には或る特定の物の効用を表はし、また或る場合には其の物の所有が伴ふところの、他の財を購買する力を表はす。一方は「使用價值」と名づけられ得、他は「交換價值」と名づけられ得るであらう……』¹⁾。ところが、今、私の見るところによれば、彼は是等二種の價值の外、更に『眞實の價格』(the real price)なるものを考へてゐたやうである。この小篇の目的とするところは、その謂ふところの『眞實の價格』とは何を意味するか、と云ふ問題である。

尤もスミスは、或る場合には、この『眞實の價格』なる言葉をば、多くの人が普通用ふるやうに、『名義上の價格』(nominal price)なる言葉に對して用ひてゐるやうである。例へば、

『……此の通俗の意味において、勞働は、貨物と同じやうに、眞實の價格と名義上の價格と

1) Wealth of Nations (Cannan's ed.) vol. I, p. 30.)

を有すと言ひ得られる。其の眞實の價格は、これ(労働)に向つて與へられるところの、生活の必需品および便宜品の分量から成り立ち、其の名義上の價格は、これに向つて與へられるところの(貨幣)の分量から成り立つと言はれ得る。労働者は彼れの労働の名義上の價格に比例してでなく、其の眞實の價格に比例して、或は富み或は貧しく、または善く酬められ或は悪く酬められてゐる……』²⁾

と云つてゐる場合には、その謂ふところの real は nominal に對するだけの意味であつて、それは普通に勞賃について、real wages と nominal wages とを分つてゐる場合の用語例と同じであり、特に其の意義を證索するほどの事はない。私が茲に問題とするのは、交換價值と或る聯絡を有しながら、しかも之と區別さるべきものであると、彼が考へてゐたらしく思はれるところの、謂ゆる眞實の價格なるものゝ意義である。斯かる場合に彼が謂ふところの『眞實』の價格は、貨幣で表現された『名義上』の價格に對する意味においての眞實の價格ではなくて、廣く人間の立場から見たといふ意味においての眞實の價格であるらしく思はれる。私は先づ其の事を述べらう。

スミスは、物の獲得のために要する労働を以て、之が眞實の價格であると見た。彼はいふ――

2) 同上, p. 35.

『各々の物の眞實の價格、即ち各々の物が之を獲んと欲する者に對し眞實に費さしむるところのものは、之を獲るがための骨折および困難 (toil and trouble) である……」。勞動は、總ての物に向つて支拂はれるところの、最初の價格であり、本原的の購買貨幣 (original purchase-money) である。世界の總ての富が本原的に購買されるのは、金または銀によりてではなく、たゞ勞動によりてである』⁴⁾。

さて此の眞實の價格なるものが、廣く人類全體の立場から觀念されたものと云ふことは、之を構成するところの『骨折および困難』または『勞動』が、『總ての物に向つて支拂はれるところの最初の價格』とされてゐるのを見ても分かる。何故といふに、廣く人類全體の立場から觀念されるればこそ、物の獲得のために費される犠牲は、人間の勞動に外ならぬことになるけれども、もし之を或る一個人の立場から觀察するならば、吾々は必ずしも勞動を費さずとも、單に貨幣または其の他の貨物を提供することにより、その必要とする貨物入手し得るからである。

『總ての貨物の眞實の價格は何から構成されてゐるか』 (wherein consists the real price of all commodities) といふ問に對し、それは、之が生産のために要する勞動である、と答へた彼は、更に進んで、それゆへに其の勞動こそ、總ての貨物の『價值』の『眞實の尺度』 (the real measure) である、となしてゐる。私は、彼が斯かる場合に謂ふところの價值とは何ぞやといふ問題を、後を

4) 同上, pp. 32, 33.

廻はして、先づ彼れの言ふところを、次に譯載するであらう。曰く――、

『労働の同じ分量は、總ての時および所において、労働者に對し同じ價値のものだと言ひ得られる。――（この一句は、第一版では、「労働の同じ分量は、總ての時および所において、労働者に對し同じ價値のものであらねばならぬ」となつてゐた。それが第二版以後、前記の如く改められたことについては、さしたる意味の違ひはない。ただ彼が、斯かる訂正、および直ぐ之に引き續く所へ一定の文字の追加などしてゐることは、彼が労働價値説について引續き物考へてゐた證據となる點において、特に吾々の興味を惹く）。――彼れの健康、力および元氣の通常の状態において、彼れの熟練および手際の通常の状態において、（この一句は第二版以後に現はる）、彼は（同じ分量の労働に従事するため）彼れの安易、彼れの自由、および彼れの幸福の同じ分別をば常に犠牲にせねばならぬ。彼れの支拂ふところの價格は、其の代りに彼れの受取るところの財の分量が如何様であらうとも、常に同じでなければならぬ。それは實に、是等の財について、時としてはより多くの分量を、また時としてはより少き分量を購買し得る。けれども變動するのは其等の財の價値で、之を購買する労働の價値ではない。總ての時および所において、生産さるゝことの困難なもの、即ち之を獲得するに多くの労働を費さしむるものは價値大であり、容易に即ち甚だ僅かな労働を以て得られるものは、價値小である。だから、労働だけが決して其れ自身の價値に變動を生ずることなきものであり、ただ其れのみが、よつて以て總ての貨物の價値を總ての時および所において、評價し比較し得るところの、窮極の且つ眞實の標準となる。それ

は總ての貨物の眞實の價格である』⁵⁾。

以上の一文において、『價格』なる語の外に『價值』なる語の用ひられてゐることが、吾々の注意に値する。私は先きに、スミスが價值を分つて使用價值および交換價值の二種となしてゐることを述べたが、以上の一文には、使用價值また交換價值なる言葉の代りに、單に價值なる言葉が用ひられてゐる。それは何を意味するか？それが使用價值を意味せざることは明かである。しかば其れは交換價值を意味するか？

これは一應、交換價值を意味するものと、解釋されぬことは無い。何故といふに、彼は價值を分つて、使用價值および交換價值の二つとなし、然る後、『この交換價值の眞實の尺度は何であるか』(what is the real measure of this exchangeable value) といふ問を發し、さうして此の問に答へた一文において、『總ての貨物の價值』の『窮極且つ眞實の標準』となるものは勞働である、と言つてゐるのだから、前後の連絡上、後に言ふところの價值は即ち交換價值を指すものだらうと、推測されぬこともないからである。

しかし、さうとばかり解釋できぬ理由もある。第一に、彼は明かに價值を分つて使用價值および交換價值となして置きながら、そのうちの交換價值を指すため何の斷りもなく單に價值なる語を用ふると云ふことは、綿密なる彼にとつて不用意なことと謂はなければならぬ。しかし假に其

5) 同上, p. 35.

の點を譲つて、彼が如き綿密なる著者にも斯かる不用意はあり得るとしても、もし其の價值なる
議を交換價値の意に解したならば、彼が勞働の價値を以て不變なりとせることは、全く意味を成
さなくなる。何故といふに、同じ分量の勞働は、時としてはより多くの分量の財を、また時とし
てはより少き分量の財を、購買し得るけれども、斯かる場合に、『變動するものは其等の財の價
値で、之を購買する勞働の價値ではない』と云ふのが、彼れの意見であるが、もし茲に謂ふごと
ろの價値が交換價値であるならば、それは相對的の性質を有すべきであり、従て其の變動の原因
は何れに在るにしても、一方が變動するのに、他方が變動しないと云ふことは、在り得ないから
である。例へば、 $A_1 = B_5$ と云ふ交換比例が $A_1 = B_{10}$ と變動したならば、それはAの一單位の
交換價値がBの五單位から其の十單位に變動したのであるが、しかし其の事は同時に $B_{10} = A_1$ と
云ふ交換比例が $B_{10} = A_5$ と變動し、従てB一單位の交換價値がAの五分の一單位から其の十分
の一單位に變動したことを意味するに外ならぬ。だからスミスが、價値といふ言葉を斯かる相對
的の意味に用ひてゐない以上、それは交換價値を意味するものと解釋する譯に行かぬのである。
しからは、スミスの謂ふ價値とは如何なるものであるかと云ふに、私はマルクスの謂ふ價値と
略ば同じものだと思ふのである。マルクスは其の『資本論』において、明白に價値と交換價値とを
分ち交換價値を以て價値の表現または現象形態に過ぎざるものだと居る。彼の意見によれば、

價值とは或る絶對的の大きさを有する一つの分量である。しかるに或る一つの商品の價值が、他の商品によつて表現され、例へばA一單位の價值がB五單位に等しいとされる時は、その五單位のBなるものが、Aの交換價值である、と云ふのである。丁度それと同じやうな考が、スミスの頭の中にも、甚だ漠然とではあるけれども、己に存在してゐたものだ、私は解釋するのである。

そこで假に私の觀察を誤なしとして、スミスの謂ふ價值は、交換價值ではなくて、マルクスの謂ふ價值と略ば同じものだとするならば、次いで起る問題は、その價值と謂ゆる『眞實の價格』なるものとは、果して如何なる關係を有するか、と云ふことである。

スミスの用語例によれば、彼は或物を獲得するための犠牲を『價格』と名づけ、その犠牲により獲得されたる物の尊重される程度を『價值』と名づけて居る。この點に關し、嘗てワルシュは次の如く述べた――。

Adam Smith always used "price" in the sense of what we give (or would have to give) in exchange for what we acquire (or want), and "value" in the sense of what we acquire (or could acquire) in exchange for what we give (or have).

茲に交換といふ言葉を、極めて廣義に解して、人間と自然との交換をも包含するものとするならば、價格及び價值なる言葉に關するスミスの用例は、恰もワルシュの言ふが如くである。即ちス

6) Walsh, The Measurement of General Exchange-Value, 1901, p. 4; n.

ミスが、一定の物の眞實の價格は、之を生産するための勞働であると言ふ時、その眞實の價格といふは、之を獲るがための眞實の犠牲といふほどの意味であり、また物の價値の眞實の標準は、之が生産のために費された勞働であるといふ時、その價値といふは、その物の尊重さるゝ程度といふ意味である。前者は之を獲るための犠牲の方面から觀念せられ、後者は其の犠牲によつて獲られた物の方面から觀念せらるゝと云ふほどの相違はあるが、畢竟同じものを別々の觀點から見たと過ぎぬ。だから、スミスの用語例に従へば、勞働は、總ての貨物の價値の眞實の標準であり、また總ての貨物の眞實の價格である、と云ふことになるのである。

斯様にミスが、總ての貨物の眞實の價格を以て、總ての貨物の價値の眞實の標準となしたことは、彼が價値を以て費用價値 (cost-value) であると觀念した證據であるが、元來、經濟上の價値は、他の種類の價値、即ち道德的價値、審美的價値、法律的價値等と異り、物の獲得のため一定の犠牲を必要とすると言ふ事情から、其等の犠牲を必要とする物に關聯して起る價値であり、簡單に言へば、畢竟、費用價値に外ならぬのであるから、——その理由の詳細は茲に畧する——、ミスの考方は、以上の如くに解釋し得らるる限りにおいて、正しいと謂はなければならぬ。しかるに、マルサスが之を批評して、

7) Malthus, Principles of Political Economy, 1820, p. 61.

We have the power indeed arbitrarily to call the labour which has been employed upon a commodity its real value ; but in so doing we use words in a different sense from that in which they are customarily used ; we confound at once the very important distinction between cost and value ;

(右大意) 『吾々は、或る貨物の上に使ひられた労働をば、勝手に名をつけて、その眞實の價值だと謂ふことが出来る。けれども、しかすることにおいて、吾々は、通常用ひられてゐると違つた意味に、言葉を用ふることになる。吾々は直ちに、費用と價值との間における極めて重要な區別を混同することになる、云々』。

と言つてゐるのは、寧ろ彼れ自身が『費用と價值との間における重要な區別』を無視してゐるのである。物は之を獲得するために要する費用の大小に比例して尊重さる(價值を有す)と云ふことは、費用と價值とが同じだと云ふことにはならない、それは只だ費用の大きさが價值の大きさを決すると云ふだけのことである。マルサスがスマスに向つて爲したと同じやうな非難は、多くの學者が今も猶ほマルクスの價值説に向つて加へつゝある所である。讀者は其の一例をツガン・バラノウスキーに發見し得るであらう。私から見れば、スマスの誤謬は、彼が一定の物を獲得するための犠牲を以て之が價值を定むる標準となした點ではなくて、却て彼が、斯かる考方を徹底せしめざりし點にある。私は次に其の事を述ぶるであらう。

既に述べたやうに、スミスは、一定の物を獲得するための犠牲が標準となつて、其の物の價值が定まる、と考へたのであるが、彼は之と同時に、他方においては、一定の物を犠牲とすることによつて獲得され得るところの報酬が標準となつて、其の物の價值が定まるとも考へたのである。言ふまでもなく、是等二つのものは互に全く相違してゐるけれども、彼は救ふべからざる程度に此の二者を混同した。彼れの見地の此の二重性は、彼れの價值論における混雜の最も主なる原因の一つである。私は次に其れを指摘するであらう。彼は、私の前に引用した章句の間に、次のやうな章句を挿入してゐる。

『或る貨物が、之を所有してゐる人（一定の犠牲を支拂つて之から其の物を獲得しやうとしてゐるのではなく、已に之を所有してゐる人、しかも其の者は彼れ自身之を使用し又は消費するでなくて、之をば他の貨物と交換しやうと思つてゐる人、に對して有する價值は、その物が彼をして購買せしめ又は支配せしめ得る勞働の分量に等しい』¹⁾。

茲では、一定の物の價值は、その物が之が所有者をして『購買せしめ又は支配せしめ得る勞働の分量に等しい』といふことになつてゐるのであつて、それは、その物を獲得するために要する勞働の分量によつて決まるといふ考とは、別の立場になつてゐるのである。彼はまた『各々の物の眞實の價格、即ち各々の物が之を獲んと欲する者に對し眞實に費さしむるところのものは、そ

1) Wealth of Nations, Vol. I. p. 32.

の物を獲るがための骨折および困難である」と言ひながら、すぐ其れに引續いて、

『各々の物が、己に之を獲てゐる人、しかも其の者は之をば賣り拂つて何等か他の物に對して交換しやうと思つてゐる人に對し、眞實に價値ある所以は、その物が彼れ自身をして之を免れしめ、且つ之をば他人の上に課せしめ得るところの、骨折および困難である』²⁾

と言つてゐる。即ち『その物を獲るがための骨折および困難』が、茲では『その物が他人の上に課せしめ得るところの骨折および困難』となつてゐる。

思ふに、是等二様のものは、あらゆる商品の交換が、スマスの謂ふる『眞實の價格』において行はるゝ限り、互に其の内容を等しくする。けれども、現實の社會における商品相互の交換は、必ずしも其の『眞實の價格』において行はるゝと限らない。これマルクスが物の價値と、その價値の表現形態たる交換價値とを分つた所以であるが、スマスは徹底的に社會的見地に立たなかつたがため、この二者を區別することにより、その本來の見方を徹底するに到らなかつたのである。既に述べたやうに、彼が勞働を以て、總ての貨物に向つて支拂はるゝ最初の價格だとなしてゐることとは、彼が人類全體の立場に立つて價値を觀念した證據である。けれども、彼は直ぐ之に引續いて、『各々の物が、己に之を獲てゐる人、しかも其の者は之をば賣り拂つて何等か他の物に對し交換しやうと思つてゐる人に對し、眞實に價値ある所以』を考へやうとして居る。さうして既に、

2) 同上, p. 32.

斯様な或る特定の人に對し一定の物が價値を有する所以を考へやうとする以上、彼は既に社會的見地を去つて個人の見地に立脚してゐるのだから、問題の性質は全く變つて來てゐるのだけれども、彼は十分に其の點を意識しなかつた爲め、この場合にもやはり前と同じやうに勞働といふことに重きを置き、從て其の物を獲得するための勞働に置き換ふるに、其の物の所有によつて支配し得らるゝ勞働を以てするやうになつてゐるのである。

しかしマルサスが早くも指摘したやうに、³⁾ the cost of a commodity in labour (或る貨物の勞働における費用) の its value in commanding labour (勞働を支配する方面における其のものゝ價値) とは、essentially different (全く違つたもの) である。彼は「——」

Adam Smith, in his chapter on the real and nominal price of commodities, in which he considers labour as an universal and accurate measure of value, has introduced some confusion into his inquiry by not adhering strictly to the same mode of applying the labour which he proposes for a measure. Sometimes he speaks of the value of a commodity as being determined by the quantity of labour which its production has cost, and sometimes by the quantity of labour which it will command in exchange. These two measures are essentially different;.....

3) Malthus, Principles, p. 63.

4) 同上, p. 85.

(右大意) 『アダム・スミスは、その著書のうちの、貨物の眞實の價格および名義上の價格に關する章において、勞働をば價値の普遍的な且つ正確な尺度だと考へてゐるが、彼は其の尺度としてゐる勞働をば、同じ方法に應用することを嚴密に守つてゐないために、彼れの研究の上に若干の混雜を惹起してゐる。時として彼は、貨物の價値は、その生産が盡さしめた勞働の分量によつて決まると言ひ、また時としては、それが交換において支配するであらう勞働の分量によつて決まると言つてゐる。しかし是等二つの尺度は本質的に相違してゐる、云々』

マルサスのこの批評は當つてゐる。けれども彼が、價値の種類を使用價値 (value in use) 名義上の交換價値 (value in exchange) 眞實の交換價値 (real value in exchange) の三種に限定することにより、⁶⁾ スミスの勞働價値説を全く拋棄するに至つたことは、角を矯めて牛を殺したものと謂はなければなるまい。

5) 同上, p. 62.